＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter
[No.11 2008/8/26]

---

gCOE後期開講科目について
2008年度第1回gCOE論文賞の応募について（再掲）
2008年度第2回大学院生海外派遣プログラム募集について
次回のオープンレクチャーについて
「テクスト布置解釈学原論」の要約
「テクスト布置解釈学各論」の要約
gCOE第4回国際研究集会の概要
gCOE研究教育員ブリーフィング要約
gCOEスタッフ海外出張報告
【故・天野教授の学部葬について】

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ gCOE後期開講科目について

後期の開講科目は下記の通りです。詳しくはグローバルCOEのWebページをご覧ください。

・「テクスト布置解釈学原論」（松澤教授、集中）
・「テクスト布置解釈学各論V」（重見准教授、火曜5限）
・「テクスト布置解釈学各論VI」（ゴーベル准教授、金曜4限）
・「テクスト布置解釈学各論VII」（古尾谷准教授、集中）

■ 2008年度第１回gCOE論文賞の応募について（再掲）

グローバルCOEでは学術論文を募って選考を行い、優秀な論文に対して「グローバル COE論文賞」として顕彰し、2009年3月刊行予定の 『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。
応募の受付期間は8月27日〜9月8日です。応募方法について詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/

■ 2008年度第2回大学院生海外派遣プログラム募集について

2008年度グローバルCOE「大学院生海外派遣プログラム」の第2回募集を行います。
受付期間は2008年9月10日（水）〜9月24日（水）です。応募方法について詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education03/

■ 次回のオープンレクチャーについて

2008年9月17日（水）18：00〜　国際センタービル15F GCOEオフィス
講演者：加納 修（文学研究科准教授・西洋史学）
題目：「メロヴィング朝の国王証書の伝来状況をめぐって」

■「テクスト布置解釈学原論」の要約

古尾谷知浩「日本古代における法制史料と行政文書」(4/18〜)

中国の隋・唐における律令法制定の歴史と、古代日本における、近江令から、飛鳥浄御原令、大宝律令・養老律令に至る律令継授の過程、詔・勅・太政官符などによる単行法令・施行細則の制定、格式の編纂、および『令義解』『令集解』など、律令注釈書の生成過程を整理して解説した。合わせて現存法制史料の伝存情況を説明し、その書式を比較検討した。その上で、法制史料の布置構造について概説した。

さらに、それを踏まえて、法規定に基づいて作成された行政文書につき、戸籍・計帳を例に、その作成過程を律令規定に基づいて整理して解説した。合わせて正倉院文書などとして伝存する戸籍・計帳類、および漆紙文書などの出土文字資料にみえる戸籍・計帳関係文書を通覧し、その書式を比較検討した。その上で、行政文書の布置構造について概説するとともに、法規定と、その運用のあり方や社会の実態との関係について解説した。

小川正廣「ホメロスの口誦詩と文字使用」(5/28, 6/25)

紀元前８世紀頃のギリシア詩人ホメロスの作と伝えられる叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』は、現存の状態では合わせてほぼ27,000行の古代ギリシア語テクストを構成しているが、その成立に関しては古来大きな謎として人々の想像をかきたててきた。
まずホメロスの物語の神話的題材に関しては、シュリーマンのトロイア発掘以来１世紀以上を経た現在、ミュケナイ文明の進展と広がりを歴史的コンテクストとして定置することができる。しかし、まだなお解明すべき問題は、ミュケナイ時代のあとに成立したホメロスの膨大なテクストそのものの生成のプロセスである。紀元前８世紀後半には、ギリシア世界ですでにアルファベット(音素文字)の使用が始まっていた。伝統的な口誦詩(オーラル・ポエトリ)の特徴が濃厚な現存のホメロスのテクストの創造と初期の伝承に対して、この新たな文字ははたして何らかの形で関与したのか。
こうした問題をめぐって、最初にミルマン・パリのフォーミュラ理論を点検しながら、非文字テクストの生成のメカニズムを明らかにする。次に非文字テクストに対する文字の作用について探り、文字使用がホメロスの詩の伝承のどのような段階から関わったのかという点に対して、テクストそのものに内在する言語的特徴を手がかりにして考えてみる。なお受講生はギリシア語やギリシア文学について特別な知識がなくても授業の内容を理解できるよう、さまざまな視覚資料も用いて講述する。また日本文化に関心をもつ学生なら、『古事記』の成立や本居宣長の文献学的研究ともつうじる問題を見いだすことができるだろう。

クレール・フォヴェルグ「17世紀・18世紀の解釈論」（7/3, 7/10）

17世紀にはベーコンとホッブス、さらにライプニッツのような著者は、論理学が不要となる分野において解釈の知識の重要性を問題にする。そこでベーコンは、「自然の解釈」という観念を述べて、被造物に印刻されている神の悟性の観念を解釈するのに一番良い方法は、現実を実験によって経験することだと示す。解釈は論理学のように知的な作用に係わることなく、むしろ実験によって自然と技術のそれぞれの作用に係わるのである。一方ホッブスは、聖書の解釈が哲学的な真実を望むことなく、言葉の意味に留めておけば良いと断言する。ところで、解釈の根拠となる理性の要求は聖書と自然の法則との一致を前提とする。
ライプニッツによって、解釈の知識の重要性が明らかになる。それは「類似の知識」に属している。可能性しか検討しない普通の論理学と異なって、解釈は「真実らしさの論理」または「本当らしさ」の論理によって行われる。その結果、解釈が神秘的教義にも自然の真実にも係わっていて、神秘的教義も自然の真実も信じるものであって、理解されなくても意味を成すという特徴を示しており、さらに「適切な」観念

の要求の仕様がないので、ただ説明される特徴を示す。
以上のコンテクストにおいて、解釈の観念が『百科全書』と『自然の解釈に関する思索』をはじめとしてディドロのテクストに述べられている。明白であるベーコンの参照のほかに、ディドロはライプニッツに通じていて、知識は記号の結合であり、その結合は自然が組み合わせている存在と性質と、または現象と現象の連結とある程度の類似があると考え、さらにその類似の説明は解釈によるものと考えている。
『百科全書』において、解釈の方法は自然を構成する存在にも、その存在の性質と表象にも、観念と表現にも応用されて、さらに知識の体系とそれぞれの体系の関連に応用される。ディドロに執筆された哲学の歴史の項目に実施される『百科全書』による体系の解釈は、知識の体系を思考の自然の形に帰することにある。したがって、科学と技術の進歩が正しく再評価される。

■「テクスト布置解釈学各論」の要約

各論I　佐藤彰一

歴史学のみならず、人文科学の理論全体においても重要な意味をもつ「封建制」という概念を、テクスト論の観点から脱構築することがプロジェクトの狙いであり、講義内容はその予備的作業を試論的に提示することであった。
脱構築作業は、まず封建制概念がどのような歴史的モデルを鋳型として形成されたかを、概念史的に明らかにするところから出発する。日本語でいう「封建制」とヨーロッパの「ヒューダリズム」の差異を正確に認識する必要がある。日本語の「封建制」は、中国古代の国家統治の様式であった「封建制」を概念上の淵源としており、中央からの統制のもとに地方を統治する方式である「郡県制」の対概念である。ここにすでに「ヒューダリズム」との明瞭かつ無視できないズレが見てとれる。日本語で言う「封建制」概念の地平には、参照枠としての「国家」が組み込まれているのに、ヨーロッパの「ヒューダリズム」には、たとえば最も有名な中世史家マルク・ブロックの構想を例にとるならば、それは国家機構の存在を前提としていない。むしろ国家が体現する公的秩序不在の時代に機能し、秩序を代替する役割をになったシステムと考えられているのである。この意味論上の格差は重大であり、封建制とヒューダリズムは決して同義の概念ではないことが、この一事をもってしても直ちに納得されよう。
ヨーロッパの封建制概念の脱構築をめざす私の議論は、それゆえヨーロッパのヒューダリズム概念の形成史となるわけだが、留意しなければならないのは、日本の近代歴史学において「封建制」の概念を用いる際、人々の念頭にあったのは明治期の啓蒙史学において共通の認識となっていた「郡県制」の対抗概念であった「封建制」ではなく、実は「ヒューダリズム」の翻訳語としての「封建制」であったという複雑なネジレ現象である。したがって学問用語としての「封建制」の脱構築のためには、いずれにしてもヨーロッパのヒューダリズムを対象にするのが有効な作業となる。
講義では中世ヨーロッパでの封建制の古典的理解を解説し、ついで近年ヒューダリズム概念の有効性を根底から覆す議論を展開し国際的な反響を呼んだスーザン・レノルズの論を紹介し、翻ってヒューダリズムの基底にあるフェウドゥム（feudum）を、法学的に根拠づけた最初の著作である１３世紀の『知行の書』およびこれを解説した１６世紀の人文主義者の理解、モンテスキュー、ヴォルテールら啓蒙思想家のヒューダリズム論、カール・マルクスのインパクト、１９〜２０世紀ドイツ歴史学におけるヒューダリズム論、マルク・ブロックの論、第二次世界大戦後のヒューダリズム概念等を紹介し、今後の展望を示した。

各論II 高橋亨（4/16, 5/14, 5/28, 6/4, 6/11, 7/16）

はじめに、テクスト布置と解釈学について、担当者それぞれの立場から、導入として説明した。各論の個別としては、平安朝の物語と絵と歌の関係について、『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』など、王朝物語の歴史的な展開を示した。また、平安朝物語絵の特徴として、引目鉤鼻による顔貌表現と吹抜屋台による室内表現などを説明したうえで、『源氏物語』と源氏絵を中心に、テクスト論の視点

から論じた。
また、源氏絵の具体例について、パワーポイントによる画像や書物の図版によって示し、絵巻・冊子・画帖・掛け軸といったテクストの形態の差異、また、肉筆と版本、彩色と白描などの差異について概説した。
高橋の担当部分の参考資料として、『源氏物語の詩学』第㈹部第３章の「物語と絵巻物ーー源氏物語の時空」をコピーして配布し、これにそって授業をすすめた。その主な内容は、（１）物語と絵巻物の〈文法〉、（２）語り手と視点人物、（３）物語絵と雛と女君たち、（４）物語の男にとっての絵と人形、（５）中心と周縁の〈文法〉と物のけ、（６）物語絵の正典化と王朝〈女〉文化の伝統、（７）源氏物語の内なる絵画史である。
授業の参加者には、この論文を参考にして、各自の研究の専門領域をふまえて、テクスト論の視点から考察することを求めて討議した。
最後に、源氏屏風や画帖を具体的に見学する機会を用意して、希望者による個別参加として、意見を交換した。

各論II　阿部泰郎（6/18, 6/25, 7/2, 7/9）

○宗教の領域こそは、他にもすぐれてテクストを創出することによって自らを形象しようとする運動体である。換言すれば、宗教という現象を、悉くテクストとして捉えようと試みることが可能である。そのカテゴリーを、全てテクストという視座において体系的に認識することは、テクスト学の課題であり実践に他ならない。豊かな展開とその所産を示す日本の宗教について、これを聖典、目録、経蔵（宝蔵）、儀礼、図像という対象と視点から、具体的に検証する。
○聖典という〈聖なるテクスト〉の超越性と越境性について、時空や言語を超えて展開を志向する動きと、絶えず解釈と自己言及を反復する動きについて指摘し、反面で文字の呪性と書かれ、読まれる機能から発現する神秘化と限りない荘厳の運動について、ケルズの書と平家納経を例に挙げて論ずる。次に目録というテクスト集合の座標（マトリックス）を、一切経から章疏そして聖教という中国・および日本仏教の宗教テクストの展開において果たした役割から見渡し、それら目録に可視化されたテクストが、国家ないし王権の許で経蔵ないし宝蔵という場（トポス）に収集、分類されて相乗的に権威を創出する装置となることを、蓮華王院宝蔵目録や守覚法親王の各種目録とテクスト編纂の営為を通して論ずる。
○密教において顕著な儀礼創出とテクスト生成の双方向での不可分性を、文観による三尊合行法聖教を素材として分析を試み、空海の御遺告という新たな聖典の注釈と本尊図像の創案が中世密教の到達点であり、また彼の王権図像である後醍醐天皇御影と瑜祇経灌頂の儀礼および瑜祇経注釈と図像創出の密接な関係について論じた。最後に聖徳太子をめぐる図像学について、その尊像と講式および絵伝と太子伝という中世に形成された儀礼を含む図像体系を座標化し、そのイコン複合が説話図像としての絵伝における壮大な複合図像体系にまで展開することを論じた。
　なお、本講義は講師が学術責任者を務めたグローバルCOE第４回国際研究集会「日本における宗教テクストの諸位相と統辞法」の序説というべき役割を果たした。

各論III 釘貫亨 (4/21,4/28, 5/12, 5/19)

　日本は、５世紀に漢字を受け入れて以来、７世紀末から８世紀初頭にかけての東アジアの国際情勢を受けて歴史上初めて国家を建設するに至った。これと同時に日本社会は、行政が文書に基づいて行われる文字社会の段階に到達した。文字に反映した日本語的特徴は、最初は人名地名を表記した仮名表記に現れたが、律令国家は天皇の口頭伝達（宣命）を転記するために仮名を助辞表記に転用した。これを当時の官人達は叙情歌の表記に応用した（和歌）。宣命と和歌の表記で完成した日本語表記は、太宰府歌壇と越中歌壇に於ける総仮名表記にいたって極限形態を実現し、やがて平安王朝文芸の平仮名へと向かう素地を形成した。

各論III 町田健 (5/26, 6/2, 6/9, 6/16)

言語テクストは、その基礎的単位である文が、一定の構造に従って配列されることによって構築される。文の表示する事態を構造に従って合成することにより、テクストの意味が導出される。テクストの意味を正確に理解する、すなわちテクスト作成者が意図した意味を再現するためには、事態が成立する状況と事態の構成要素との関連を厳密に見極める必要があると同時に、文の構造と文が表示する事態との関係を理論的な観点から論じることも必要となる。本講義では、これらの問題に対して、真に論理的な手法で接近することを目的として、 Richard Montagueの提示した形式意味論における、状況を組み入れた事態理解の論理学的方法を議論するとともに、論理学者Quineの理論的統語論に対する論理学の観点からの批判的検討に関する論考を題材として、論理学的意味論の言語学に対する貢献とその問題点を論じた。

各論III　釘貫亨 (6/23, 6/30, 7/7, 7/14)

日本の文字社会の中核に位置する漢字は、古代に於いては貴族及びその文化圏に連なる僧侶の専有物であったが、鎌倉時代を境にして漢字の知識が仏教を媒介にして民衆に下降し始めるという現象が出来した。親鸞は、自らの信仰についての深奥を極めた著述には漢文を使用したが（『浄土三部経註釈』、『教行信証』）、民衆を教化する目的の文献に於いては、漢字片仮名交じり文を使用し、しかも漢字の部分には徹底的に振り仮名を施した（『西方指南抄』、『三帖和讃』）。これは、法座に於ける浄土教の教理を口頭伝達することを念頭に置いた書式である。鎌倉時代以来、啓蒙的な文献に於いて漢字に降り仮名を施すのは通常の書式であり、近世における大衆的出版物に於いてもかかる書式が踏襲された。近世後期は、行政の他、商工業や農業でも文書実務が常態化して、文字社会は極めて大衆的に拡大した。近世文字社会の中核に於いても古代、中世と同様に漢字の存在があった。幕末期に前島密が徳川慶喜に建白した画期的な国字改革案である『漢字御廃止之儀』が日の目を見なかった原因の一つが、大衆社会に拡大した漢字文化であったことは注目すべき事柄である。漢字は日本人の文字生活に負荷を掛ける一方で、抽象的概念の表示に適しており、１８世紀以来、押し寄せていた西洋文化を漢字によって翻訳し、理解を容易にしたことが日本の近代化に貢献した。

各論IV　クレール・フォヴェルグ(5/1, 5/29, 6/5, 6/12)
「『百科全書』項目「自然法」の読解」

ディドロの思想における自然法は一番多くの解釈を現れ出させた『百科全書』の項目に基づいて検討した。その項目は「政治的権威」項目（1751）と「自然法」項目（1755）である。
「政治的権威」項目において、ディドロが権威を正統とする条件を定義する。自然の原理と国家の原理に制約された権威は政治権威となる。
「自然法」項目において、自然状態の仮説状況の場合は義務も権利もなく、善も悪もただ獣性の善と悪であるだろうとディドロが述べる。衡平そのものも、「政治的権威」項目で定義されたように、正統なる権威に因らなければ真実にならないだろう。したがって自然法は人間を一番代表する原理すなわち一般意志に基づくのである。
一方、『百科全書』においてディドロに定義された自然法の原理と『国際法』（1693）においてライプニッツに定義された自然法の原理の両者の共通点を検討した。道徳と自然の同等は善良な人にしか現存しないとライプニッツが述べる。したがって、ライプニッツは権利を道徳的な権能として定義し、義務を道徳的必然として定義する。以上の様にライプニッツに記述された自然法の原理は『百科全書』の「ライプニッツ主義あるいはライプニッツ哲学」項目（1765）においてディドロによってフランス語に翻訳された。

各論VI　天野政千代、ゼーン・ゴーベル

本講座では、テクスト布置の解釈学的研究から得られる知見を、国際的な状況に於ける英語による研究発表へと応用した。とりわけ、大学院生がテクスト間の幾つかの関係を理解する手助けをする一方で、彼らにそれらの理解を自らの研究の準備と口頭発表を通して応用する機会を与えた。授業では2つの主要なテクスト間関係を検討した。一つは、学生自身の学問的背景から来る前テクスト(つまり自らが専攻する分野に於ける理論や方法論に関する知識)とメタ・テクスト(つまり、研究上の疑問への適用を介した、それら前テクストに対する自らの解釈)の間の関係である。もう一つは、これらのメタ・テクストがパラ・テクスト或いはジャンルとして表現され得る方法に関するものである。例えば、パラ・テクストは要約、研究報告書、雑誌論文、学術書、学会発表等の形を取り得る。学生は次に解釈学的テクスト布置に関する理解を、自らの分野に於ける研究上の基礎(つまり前テクスト)を検討することで応用した。この過程を経ることは、学生が学問的な知識の基礎にある隙間を見つけ出す助けとなった一方で、そのような知識の基礎の解釈にも寄与した。手短に言えば、学生が次いで2つの異なる種類のパラ・テクスト——例えば、自らの現在の研究計画の要約や口頭発表——として再文脈化したメタ・テクストを形成することである。

■ gCOE第4回国際研究集会の概要

---

gCOE第４回国際研究集会「日本における宗教テクストの諸位相と統辞法」
学術責任者　阿部泰郎（文学研究科教授）

この研究集会は、人文学の先端研究として、人間の創出した文化の極致としての宗教を、テクスト学の立場から本格的に解明する試みであり、その豊かな諸相を示す日本における宗教テクストの世界を対象に、諸学横断的に探究する目的で企てられた。設定された領域は、宗教学と仏教学による「聖教」と「目録」、歴史学による「密教」、民俗学による「儀礼」、国文学による「和歌」、神道学による「神道」、美術史学による「図像」の６部門である。各部会は、それぞれの分野でテクスト研究を推進する第一人者を座長に招き、その企画の許で若手研究者の意欲的な報告を、招待と公募の双方の形式で撰び、これに中堅のコメンテーターを配して、各専門の最先端の研究成果を並列して提示することにより、自ずと相互に連環し交響し合うように配慮した。
集会は、拠点リーダー佐藤彰一教授の開催挨拶のもと、7月19日から21日までの三日間行われ、その前後に真福寺大須文庫の聖教調査研究の成果を展観とワークショップにより照会するプレ・カンファレンス（18日）と、伝統的な宗教儀礼の場における宗教テクストの諸相と機能を実地に体験するための北陸真宗寺院法会見学のエクスカーション（22〜23日）を行って、総勢40名以上のメンバーによりプログラムが実施された。
中でも、海外の代表的な日本宗教研究者による先端的な宗教テクスト研究の成果を、ルチア・ドルチェ教授（ロンドン大学・日本宗教研究センター長）とジャン・ノエル・ロベール教授（パリ高等学院・フランス学士院会員）に、日本語による基調講演として披露していただき、聴衆一同深い感銘を受けた。全日程の参加者はのべ350名を超え、各部会は熱気と興奮に包まれ、テクスト学に対する人文諸学の研究者の関心の高さがあらためて示された機会であった。

■ gCOE研究教育員ブリーフィング要約

第7回ブリーフィング(2008/7/30)
小澤実「ハーラル青歯王によるイェリング・モニュメントの形成　そのテクストとコンテクスト」

本発表は、ハーラル青歯王（d.987）によるイェリング・モニュメントの形成プロセスとその社会的機能を、そこに見られるルーンテクストとそのコンテクストに注目することによる解明を目的としている。発表者は昨年の論文で、（1）テクストの差異化、（2）石碑それ自体の差異化、（3）設置空間の差異化、

（4）社会コンテクストの変化という四つのフェーズに分割して、ルーン石碑を分析することを提唱した。今回はイェリングにある、ゴームによる小石碑とハーラルによる大石碑の二つの石碑を中核とするモニュメントにこの手法を適用した。興味深い事実としてわかったことは、ゴームとハーラルはいずれも「王」であるにもかかわらず、それぞれの建立した石碑の様相は全く異なる。それはおそらく両者がもっていた権力の差の反映であり、ゴームからハーラルへと王権が継承される間には、現在理解されている以上に大きな溝があったことが予想される。

谷部真吾「祭りの統合機能に関する覚書　――遠州「森の祭り」の戦中期を事例として――」

1998年に九州大学で開かれた第６回「宗教と社会」学会において、「都市祭礼研究の課題と可能性」と題されたワークショップが行われた。このワークショップの中で問題設定を行った竹沢尚一郎によると、祭礼研究は過去の呪縛を引きずっており、その１つは祭礼の集団的沸騰が成員に共同性をもたらすというデュルケムの宗教社会学であるという（竹沢尚一郎1999「問題設定」『宗教と社会』別冊pp.81-82）。確かに、竹沢が指摘する通り、これまでの日本の祭り研究を概観してみると、参加者たちの葛藤や対抗関係の背後に共同性を認めている論考の多いことに気づかされる。しかし、本当に、そうした予定調和的な理解でよいのだろうか。本発表では、以上のような問題意識から、静岡県周智郡森町にて行なわれる「森の祭り」において、1939〜40年（昭和14〜15）に起こった騒動を事例として取り上げ、デュルケム理論への問題提起を試みた。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

松澤和宏（gCOE研究担当サブリーダー・フランス文学）

6月9日より約１ヶ月ほどパリ東大学にて招聘教授として、フローベールを中心としたフランス文学の講演講義を行った。フランス語でフランス文学のテクスト解釈をフランス人に教授することは、日本語で話す時には味わえない緊張を覚えるものである。テクストが文字通り対話の場であり、読み手が自らの文化的コンテクストを背負っていることを実感できたことは、貴重な収穫であった。パリ東大学では、名古屋大学との全学交流協定に向けた意見交流を事務の責任者と行った。来年3月にパリ東大学と名古屋大学のGCOEとの共催による「知のテクスト化」と題する国際シンポジウムを予定している。
また6月16-17日の2日間にわたってベルギーのナミュール大学主催「価値の言語学- 新ソシュール言語学のプログラム」と題する国際シンポジウムに参加して、ソシュールにおける価値体系と時間性をめぐる研究発表を行った。昨年ジュネーヴ大学で催された大規模な国際シンポジウム「ソシュール革命」以降、ソシュールの草稿研究の気運がようやく高まってきたと言えよう。

【故・天野教授の学部葬について】

グローバルCOE教育プログラム推進室長、日本英語学会会長、文学研究科英語学研究室主任を務められ、去る6月13日にご逝去された故・天野政千代教授の学部葬が下記にて執り行われます。

日時　2008年8月30日（土）午後2時（受付開始　午後1時から）
場所　名古屋大学シンポジオンホール

次回のメール版NewsLetterの発行は2008年9月中旬 を予定しています。
・‥…━━━…‥・

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.11
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行
Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS